

令和 6 年 5 月 4 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00598

研究課題名（和文）独話タスクと教室談話における日本語のアカデミック・スピーキングの特徴と習得の研究

研究課題名（英文）A study of Japanese academic speaking in elicited speech and classroom discourse

研究代表者

畑佐 由紀子（Hatasa, Yukiko）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・名誉教授

研究者番号：40457271

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国内の留学生に対する効果的な教材や評価システムの開発をするための基礎研究として、日本語のアカデミック・スピーキングの特徴や学習者の習得実態を探るために日本語母語話者と習熟度の異なる学習者の論証・説明・描写の独話タスクの発話コーパスを構築し、3つのタスクにおける日本語のアカデミック・スピーキングの特徴と学習者の習得実態を明らかにすることを試みた。加えて、授業中のディスカッションでの学習者と母語話者の発話のデータベースを構築し、独話タスクでの発話が授業での発話をどの程度反映するか検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アカデミック・ジャパニーズの研究や教材開発はアカデミック・ライティングの分野での発展が中心であり、学習者のアカデミック・スピーキングの問題点や習得状況を解明する研究は極めて少ない。また、日本語母語話者のアカデミック・スピーキングについては、一部の表現の質的分析にとどまり、その特徴の全体像はわからない。本研究により、日本語のアカデミック・スピーキングの特徴及び学習者の発話の特徴と問題点を明らかにすることができる。また、学習者評価には独話が用いられることが多いため、独話に見られる特徴と教室での発話に見られる特徴を比較することで、より整合性の高い評価法について検討することができる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we constructed a corpus of Japanese native speakers and learners at different levels of proficiency in the argumentation, explanation, and description tasks. Based on the analysis of the corpus data, we attempted to clarify the characteristics of Japanese academic speaking in the three tasks and the actual state of learners' acquisition. In addition, we constructed a database of learners' and native speakers' utterances in class discussions, and examined the extent to which advanced learners' monologues reflect speech in the class discussions.

研究分野：第二言語習得

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ 日本語教育 第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

近年、国内の大学・大学院で学ぶ留学生が急増したことから、アカデミック・ジャパニーズの指導のための基礎研究も増えている。けれども、アカデミック・ジャパニーズの研究や教材開発は作文やレポート作成などアカデミック・ライティングの分野での発展が中心であり、学習者のアカデミック・スピーキングの問題点や習得状況を解明する研究は極めて少ない。また、日本語学習者だけではなく、日本語が母語である日本人学生のアカデミック・スピーキングの実態についても解明が進んでいない。初年次教育等でアカデミックスキルの重要性が強調されつつあり、プレゼンテーション等の指導が行われている場合もあるが、日本人学生が授業やゼミ、教員との会話の中でどのように自分の意見を伝えたり、読み聞きした内容を要約したりしているかなどは明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下のとおりである。

- (1) 日本語母語話者と習熟度の異なる学習者の論証・説明・描写の独話タスクの発話コーパスと教室でのディスカッションの発話コーパスを構築する。
- (2) 独話コーパスを分析し、日本語のアカデミック・スピーキングの特徴と学習者の使用実態を探る。
- (3) 教室でのディスカッションの発話と独話タスクでの発話を比較し、上級日本語学習者の独話タスクでの発話が実際の授業での発話とどの程度合致するかを探る。

3. 研究の方法

- (1) TOEFL iBT、IELTSのスピーキング・テストの項目から、論証、説明、描写を問う質問項目で、トピックに偏りがなく、目標言語が英語に限られないものを40項目選定し、中級の学習者でもわかる比較的易しい日本語に訳した。調査対象者は日本語を母語とする大学生と大学院生、アメリカ人日本語学習者、中国人日本語学習者であった。各調査対象者に無作為に抽出した10項目を提示し、それぞれについて話してもらい、発話音声録音した。音声に問題がなく全ての回答が文字化できた話者数は日本人50名、アメリカ人45名、中国人45名であった。
- (2) 独話音声と文字化したデータをもとに、複雑さ・正確さ・流暢さ(CAF)を算出し、量的に分析した。複雑さの指標としては、「語彙的複雑さ」と「統語的複雑さ」を用いた。「語彙的複雑さ」は、総語数に対する重なり語数の割合で、「統語的複雑さ」は、1 AS-Unitに含まれる節数で算出した。「正確さ」は、総AS-Unit数に対する正しいAS-Unit数の割合を用いた。そして、流暢さの指標としては、1分間に含まれる内容語の数で「流暢さ」を、1ポーズあたりの平均ポーズ時間で「非流暢さ」を算出した。
- (3) CAFに加え、Kuiken & Vedder (2018)の機能的妥当性の評価を行った。機能的妥当性は「内容的妥当性」、「タスク達成度」、「わかりやすさ」、「一貫性」という4つの項目について6段階で評価するものである。

Kuiken, F., & Vedder, I. (2018). Assessing functional adequacy of L2 performance in a task-based approach. In N. Taguchi, & Y-J. Kim (Eds.), *Task-based approaches to assessing pragmatics* (pp. 265-286). John Benjamins.
<https://doi.org/10.1075/tblt.10.11kui>

- (4) TOEFL iBT、IELTS のルーブリックを参考に、「話し方」、「語彙・表現」、「文法・構造」と「概要」、「展開」それぞれを5段階で評価するルーブリックを作成し、母語話者2名による発話の評価も行った。母語話者評価の一致率は0.95であった。
- (5) CAF、機能的妥当性、母語話者評価について相関、回帰分析を行うとともに質的にも分析した。
- (6) ディスカッションを中心とする大学のゼミ授業26回分を録音した。ほとんどのディスカッションが1時間以上であったが、20分以下のものが2回含まれていた。これらのデータを文字化した。データの中で、論証や説明、描写をしている部分を母語話者と学習者に分けて質的に分析した。

4. 研究成果

- (1) CAFと母語話者による評価の関係を分析したところ、CAFの「統語的複雑さ」、「正確さ」、「非流暢さ」は母語話者評価と有意な中程度の相関があることがわかった。CAFが言語的側面のみを評価する指標であるのに対し、母語話者評価には「概要」や「展開」などCAFに含まれない指標もあったことから、相関が中程度になったと考えられる。しかし、「統語的複雑さ」や「流暢さ」とは有意な関係が見られなかった。回帰分析の結果、「正確さ」、「非流暢さ」、「統語的複雑さ」が母語話者評価の結果を説明する有意な変数であることがわかった。
- (2) 母語話者評価と機能的妥当性の関係を分析したところ、母語話者評価は機能的妥当性の4つの項目すべてと有意な高い相関があることがわかった。帰納的妥当性は、母語話者評価の指標と重なる点が多いことから、相関が高かったと考えられる。しかし、項目の記述が異なるにもかかわらず、すべての相関が.90を上回っていたことから、高次の能力がこれらの指標に関与していた可能性は排除できない。母語話者評価と機能的妥当性が要因として独立しているのかどうかについては、今後の研究を通して解明する必要がある。
- (3) (1)(2)の結果から、本研究で作成した母語話者の評価基準は、概ね効果的に機能していると言える。
- (4) CAFと機能的妥当性の関係を分析したところ、機能的妥当性の4項目は相互に高い相関を示していた。また機能的妥当性は、CAFの「統語的複雑さ」、「正確さ」、「非流暢さ」と中程度の相関を示した。しかし、「語彙的複雑さ」と「流暢さ」とは有意な関係が見られなかった。この結果は、母語話者評価とCAFの関係と同じであり、母語話者評価と機能的妥当性がなぜほとんど同じ結果を示すのかについては、今後の検討を要する。
- (5) 日本語母語話者の発話に対する母語話者評価とCAFの関係をみると、母語話者評価は、「語彙的複雑さ」と「非流暢さ」に関連することがわかった。質的に分析したところ、話をまとめるのに時間を要し、複雑でまとまりのない発話になった場合に評価が下がることがわかった。

- (6) 日本語学習者の発話に対する母語話者の評価は、「正確さ」や「非流暢さ」と関連していることがわかった。日本語学習者は、日本語母語話者に比べ、異なり語数が少なくポーズの回数が多かった。学習者は発話の内容やアイデアについて考えるだけでなく、言語研式に注意を向けなければならないからだと考えられる。日本語学習者は、長期記憶から様々な語彙を抽出するのが困難であり、抽出した語彙を用いて文法的に正確な発話をするには、意識的な処理がかかわる。その結果、下位レベルの言語研式の処理が自動化されている母語話者ほど流暢に話せないことが、評価に影響したと思われる。
- (7) 日本語学習者の上位群と下位群では母語話者評価と「統語的複雑さ」が有意に異なる。この要因として考えられるのは、下位群が単文で話すのに対し、上位群が複文を使っていたことにあると考えられる。下位群は上位群に比べ、総語数も少なくポーズの数が多いが、AS-Unit数は上位群よりも多かった。下位群は、短文で話していたため、AS-Unit数が増えたが、複雑な文を使っていなかったことから、総語数は少なかった。加えて、言語のコントロールに時間を要し、ポーズ数が増えていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Koguchi, Yukiiko & Chen, Zhen	4. 巻 25
2. 論文標題 Use of evaluative strategies in Hungarian and Chinese learners' narratives	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Language Education in Europe	6. 最初と最後の頁 301-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 李在鉉、朴胤宣	4. 巻 91
2. 論文標題 韓国語を母語とする日本語学習者の連体修飾節における「-タ」形と「-テイル」形の選択傾向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日語日文學	6. 最初と最後の頁 99-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 李在鉉	4. 巻 96
2. 論文標題 連体修飾節における日本語「-タ」「-テイル」と韓国語の「-eun・neun」「-go・a・eo iss-neun」の使用基準の違い	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 35-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李在鉉	4. 巻 117
2. 論文標題 連体修飾節における韓日アスペクト形式の対応関係 - 文末における対応関係との比較を通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日語日文學	6. 最初と最後の頁 143-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山 千聖、畑佐 由紀子	4. 巻 26
2. 論文標題 日本語学習者のAcademic Speakingの特徴に関する量的研究 - 上位群・下位群・母語話者の比較を通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 101-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20677/csssej.26.0_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Hatasa, Yukiko & Takahashi, Eriko
2. 発表標題 Effects of lexical knowledge, production, self-monitoring on Japanese accent production by native speakers of English and Chinese
3. 学会等名 The 10th International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech (New Sounds 2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hatasa, Yukiko
2. 発表標題 Task-Based Assessment of Academic Speaking Ability in Japanese: L1 and L2 Differences in Complexity, Accuracy, Fluency and Functional Adequacy.
3. 学会等名 AILA 2022 World Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hatasa, Yukiko
2. 発表標題 Assessment of Academic Speaking Ability in Japanese.
3. 学会等名 The 16th EAJS International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小口悠紀子・帖佐幸樹
2. 発表標題 初級日本語教科書における授受補助動詞「てあげる」の扱い 「恩着せがましさ」への配慮に着目して
3. 学会等名 日本語 / 日本語教育研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 畑佐由紀子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 286
3. 書名 学習者を支援する日本語指導法Ⅰ 音声・語彙・読解・聴解	

1. 著者名 畑佐由紀子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 372
3. 書名 学習者を支援する日本語指導法Ⅱ 文法 会話 作文 総合学習	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小口 悠紀子 (Koguchi Yukiko) (70758268)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------